我ながら随分と変わったもんだ――などとまどろみの中で思いながら、妹紅はもぞりと身じろぎした。

夏の日照りもそろそろ記憶に遠く、しかし冬の身を縛るような寒さにはまだ幾分遠い、そんな季節。

自分の体温で暖まった布団にくるまる、なんとも贅沢な時間。夢と現の狭間に揺蕩う意識はそれ以外の全てを放棄したようで、起きるという選択肢はまだ選べそうにない。

贅沢。

ここ数百年でいえば、睡眠に時間を割くという点もさることながら、それ以上に布団の上で寝るのは珍しい。遠い昔はそういう習慣もあった気がするものの、いつからかすぐに起きられる姿勢で眠る癖が付いていた。

そうして半分夢の中へと迷い込んだ意識の底で、水面に映る自分自身と向き合い続ける――妹紅にとってそれは贖罪のようなものなのかもしれない。

これまでに自分が犯した罪。千年の刻が過ぎようとも決して許される事のない、そして死して地獄で罰を受ける事も出来ない自分が出来る些細な罪滅ぼし。これまでに僅かばかりとはいえ関わりを持ってしまったために迷惑をかけた人たち。それは蓬莱人、藤原妹紅の原点ともいえる時代にまで遡り、たった一人に辿り着く。

そうして自分の罪を一つたりとも忘れずにいる、背負い続ける事で、妹紅はかろうじて自分

という存在をほんの少しだけ認める事が出来るのだ。

「うーん……」

とはいえ今の妹紅はそんな消えない罪悪感に苛まれる様子もなく、穏やかな顔で布団にくるまっている。

幻想郷は妹紅にとって楽園のような場所だ。そしてこの地へ来ていくらかの年月が過ぎていく中で、ほんの少しずつではあるものの、けれど確実に妹紅も変わっていっている。これもまたその一つなのだろう。

そんな自身の変化を妹紅は最初よしとしなかったが、数少ない友人の一人である上白沢慧音に話をしたところ随分と喜ばれてしまったので、それならそれで、とそれ以来なるべく布団で眠るように心がけている。

だが、

「これはダメだ……ダメ人間になる……」

またもぞりと布団の中の暖かい場所を探るように身じろぎをして、誰に向けるでもく呟いた。

布団で眠る事による弊害。それは朝方の気温が下がれば下がるほど顕著になる。

出られないのだ。

妹紅は寒さが苦手な訳ではない。なにせ何もなくとも自分で火を起こせるのだから、いくらでも暖を取る方法はある。手段を選ばないのであれば自分自身を燃やしてしまえばいいし、実

際遠い昔に何度かそういう事もした。とても熱かった。
布団の暖かさも自分の熱から来るものなのに、どうしてこうも違うのか。火加減の問題なのか、それとも――などと妹紅が溶けた思考で考えを巡らせていると、唐突に爆発音にも似た何かが壊れる音。そして、
「――ぐえっ!?」
ほんの一瞬の間を置いて全身に衝撃が走る。同時にバキだとかグチャだとか、何かが折れたり破裂したりする音が自分の体の内側から聞こえてきて、妹紅はそのまま意識を失い、そしてすぐに取り戻した。
「あらちょうどいい所に座布団が……何してるの？」
「うるさい黙れ！　朝から不意打ちとはいい度胸だよし殺す今すぐ殺す殴って殺す」
その姿を見るより先に、その声を聞くより先に、こんな事をするのはただの一人しかいないと決めつけて妹紅が文字通り跳ね起きた。
先ほどまでの穏やかな時間と共に崩れた庵の屋根を見て、飛び散った自分の血で真っ赤に染まった壁と床と布団を見て、そしてこの惨状の原因たる自分の上に降ってきた相手を見て、妹紅は何かを考えるより先に飛びかかっていた。
「クソッ！　布に付いた血は落ちないんだぞお前が洗濯しろ！」
「そんなの知らないたたた髪引っ張らないで痛い！」

幻想郷には弾幕ごっこという遊びがある。
人間も妖怪もそれ以外も、強い力を持つ存在が多いこの地において、争いごとにもルールを決めておかないと色々と大変な事になるから――というものであり、遊びでありながら様々な物事の解決手段にも用いられる。強い力を持つ者であればあるほど、その弾幕は自身の余裕と在り方を示すものとして、より優雅で煌びやかなものと成り、それを目当てに野次馬に来る人間やそれ以外も少なくない。
そんなコミュニケーションツールとしての弾幕ごっこ。そして妹紅と輝夜もまた幻想郷内では強者に分類される二人なのだが、ギャーギャー騒ぎながら取っ組み合いをしている今の状況は、残念ながら優雅さの欠片も感じられないものだった。
だが、普段であればこのまま日が暮れるまで続けられる獣じみた二人の争いは、横合いからかけられた声にぴたりと止まる。
「楽しそうね。私も混ぜてくれる？」
突如現れた第二の侵入者。輝夜はその存在を知っていたのか特に反応もせず、結果的に妹紅だけがその声の方を向く事になった。
「お前は……」
言いながら、妹紅が相手の顔を見ようと視線を上げる。特に意識をした訳ではないものの、輝夜に組み敷かれる格好になっていたため、自然と足下から見上げていく形になってしまった

月の明かりのまあ眩い事眩い事。
「いやふざけるなよ」
夜とは呼べない程明るい夜。
煌々と光り輝く大満月に照らされて、藤原妹紅は呆れていた。
「こちらは正気よ？」
対して微笑む八意永琳。
明るい夜に対峙するには剣呑な両者だが、普段ならある殺意や侮蔑の類が欠片もない。
「もう一度言うわ」
笑みは絶やさず永琳が一歩を進めば、反射的に下がりそうになった妹紅は気合で耐える。
「あの月は異変に相当する。なのであなたは私と共にアレを調査しなければならない」
そして永琳が本当に同じ事を言ったので妹紅は再び呆れ顔になった。
「……あー……理由は」
溜息の後に短く問う。
どうせ何をどう反駁しようが実力で抵抗しようと悉皆無駄なのは経験上分かり切っており、ならばもうこれしか妹紅に取れる手は残されていない。
実質、永琳が現れたその時点から全て彼女の掌の上なのだ。
仮にそうでなかったとしても、永琳がそれと悟らせる事はまずないだろう。

「あの月光に外から近付いても耐え得るのは蓬莱人のみ」
「なら――」
「私が輝夜を危険に晒すとでも？」
「ああうん」
嘲りたっぷりの言葉に自分の失策を恥じて妹紅は奥歯を噛み締める。
蓬莱山輝夜という妹紅にとって極悪の存在は、永琳と並々ならぬ関係なのだ。それも共犯とか主従とかそういう生易しいものでは無く、二人の関係は――特に永琳側からのそれは輝夜側からと比べ、表現し難い異質さがあると妹紅は以前から感じていた。
「でもお前が動くならお前一人で十分だろ。なんでわざわざ足手まといなんか」
「もし人手が足りなかったら困るでしょ。私が」
ただそれだけ。
薬箱と弓を手にする永琳の佇まいから表情から声音抑揚僅かな仕草の一つに至るまで、真実言葉通りなのだと妹紅に確信させるには十分だった。
嘘偽りのない心からの言葉に妹紅はそりゃあ光栄な事でと毒づいた。
「で？」
「……行くよ、どうせ断っても無駄だろ？」
「余計な手間を省いてくれて助かるわ」

想定より早い妹紅の決断に永琳は喜んだ。
もちろんその喜色の下にどんなグロテスクな思索が張り巡らされているか知れたものではなく、妹紅としてはもう心の底から不本意に思わざるを得なかった。
「いつか泣かすからな」
「それは楽しみね」
嫌味のない笑みを浮かべ、付いてくるのが当然とばかりに歩き出した永琳を舌打ちせんばかりの顔で妹紅は追った。
太陽の下冬支度を始めつつ風にそよぐ草原とは違い、過剰な月光の下にあっても夜の風情はそれなりに残されている。例え今秋夜に輝く大満月が本来の月齢からしたら有り得なかろうと、尋常の月と比べたら余程手が届きそうな大きさの月であろうと、夜は夜なのだ。
闇の帳を払う太陽の気配が無ければ、草木が起きる道理はない。
夜とは眠る時間なのだ。
それは妹紅や永琳とて例外ではない筈なのだが、早々に姿と歩調に差が付いている。妹紅からすれば寝ていた所を起こされての事なので無理からぬが。
「お前こうなると分かってたの？」
「何故？」
「何でこの夜中にいつも通りなんだよ」

「あの月を見て何か思う所はないの？」
「は？」
眠気を振り払い切れていない妹紅は、立ち止まった永琳が月を指さすのを見て自分も足を止め、夜空を見上げた。
全く見事な大満月だ。
星々の光を圧して余りある大き過ぎる満月。
今更永琳があんな問い方をした以上、光と大きさ以外に何かあるのだろうけれど。
「……いや……うん？」
目を細めて直視していると何か違和感はあったが、その正体を言い当てる事はできなかった。
「それで十分だわ」
「十分て。あ、おい待てよ」
再び歩き出し――宙に舞った永琳を妹紅は歩きじゃないのかと慌てて追う。
追いながら、自分が違和感を覚える程度でもあいつなら何かしら思い至るもの――最低でも眠気が完全に消える程度の――があるのだろうと一先ず納得する事にした。
まさかからかってはいないだろうし。
どうにも胡散臭く思いつつ、妹紅は永琳の向かう先がすぐに分かった。
先程の彼女の言葉にもあったが、今異変が起きていると断定するなら博麗神社へ赴くのはそ

死ぬまでにやりたい一〇〇のこと――そんな話題が里では流行っているそうだ。
それを慧音から教わった時、私は「なるほど……ではまず私を殺してみてください」と屏風に描かれた虎の前で投げ縄を振り回す小僧のような顔で答えてみた。
「まぁ、そう言うな。これは思考実験だよ。仮定としての死――己が人生の刻限を想定することで自身の嗜好と志向を明確にさせる。そうすれば人生において足踏みしている暇などないということが自ずと解るだろう。死について考えることは生について考えることと同義。それなりに意義のあることだと思うのだがな」
囲炉裏の栗がばちんと爆ぜる。
死ぬことはなくとも痛みはあるので、思わず首を竦めた。
「妹紅はどうだ？　何か死ぬまでにしておきたいことはないのか？」
答えるのが面倒なので無言で栗を炒っていたのだが、慧音も引く気はないらしい。
普段ならば空気を読んでくれるのに引く気がないということは……おそらくここから何かしらお説教に繋げるつもりなのだろう。慧音の説教はいつも的確で、ぐうの音も出ないほど正論だから耳と心が痛くなる。
そして痛いのはやっぱり嫌なのだ。
死ななくても。
良薬口に苦しというが、病気でもないのに苦いものなど飲みたくない。

慧音が差し入れとして持ってきた栗を鉄鍋で炒りながら、何気ない風を気取りつつ頭の中で激しく思考を巡らす。さて今回のお説教ネタは何だろう――輝夜との喧嘩で竹林の一部を焦がし、ついでに衣服も焼失して泣きながら全裸ダッシュかました一件だろうか。それとも慧音の伝手で夜雀の店に卸していた酒をこっそりちょろまかしていたのがバレたんだろうか。それともそれとも最近私に弟子入りしたフランが勢い余って月を爆発四散させた一件だったりとか？

いやあれはレミリアが運命を操ってなかったことにしたんだっけ。余波で私の記憶もあやふやになったから、あの場にいなかった慧音が知っているはずもないんだけど……

動揺して迂闊なことを口走ればやぶへびだ。

ここは知らんぷり一択だろう。

「そうだなぁ……美味いもんをたらふく食いたい、かな」

本心では『別にないよ』の一言なのだが、そう告げるとお説教三時間コース確定である。

さすがにそれくらいは予測できたので、適当な要望を述べて様子を探ってみた。

「ほう！　どんなものが食べたいのだ？」

意外にも慧音は目を輝かせて喰いついてきた。

自暴自棄で投げ遣りなところを窘めるネタ振りと思っていただけにちょっぴり戸惑う。

勘繰りすぎだったのだろうか。

輝夜と付き合っていると、どうも性格が悪くなっていけない。

「うーむ、海の幸とか、かなぁ。幻想郷じゃ中々手に入らんしね」
「海の幸か……私も食べたことはないなぁ。海では生の魚を食うというのは本当なのか？」
「ああ。刺身にして食べる。味もだが食感が面白いんだよ。魚の種類、どころか部位によっても歯応えとか味とか色々違っていてね。ヒラメの縁側なんか最高だ」
「なるほど、海の幸か……よし、私もそれを加えておこう」
そう言って慧音は懐から取り出した帳面に、筆ですらすらと文字を加えていった。
「もしかして……慧音もやってるのか？　その、死ぬまでにやりたい云々ってやつ」
「そうだぞ？　人に勧めておいて自分はやらないなんて道理はないだろう？」
やはり勘繰りすぎだったか。
慧音は裏などなく、単純に茶飲み話としてこの話を持ちこんだらしい。
ほっとして肩の力が抜ける。輝夜との刃の上で戯れるような会話も実のところそれなりに楽しかったりするのだが、やはり慧音とは気の置けない間柄でいたいものだ。
そうなると俄然興味が湧いてくる。自分のやりたいことを吹聴するほど酔狂じゃないが、他人のやりたいことにまるで興味を持てないほど枯れてもいない。
ましてや慧音のやりたいことなのである。慧音にやりたいことがあって、何かしら手を貸せることがあるならば、是が非でも叶えてやりたいじゃないか。それくらい慧音に対しては恩も義も感じているし、なにより慧音のやりたいこととやらに興味がある。

「どれ、ちょっと見せてみろよ」
「やんっ」
慧音の思いがけぬ乙女な声に思考が白く染まる。
帳面を胸元に押し当て、恥ずかしそうに身を捩って頬を染める様は尋常ならざる色気があるが、それより先の「やん」という上ずった声が、慧音らしからぬというか、隠れた一面を見せられたというか、その、ぶっちゃけ、萌えた。
「あ、あの、慧音さん？」
「ん、んん……こほん。すまんがこれはその、まだ自分でもいまいちまとめきれてなくてな。とりとめもないし、字は汚いしで、とても人に見せられたものではないのだ。いずれきちんと清書するので、今は勘弁して欲しい」
「……別に今更だと思うけどな。いつも歴史書の推敲を手伝っているわけだし、殴り書きだの走り書きだのは見慣れているよ？」
実際、慧音の書き散らす覚え書きの荒々しさときたら、筆舌にしがたいものがある。
あれなら象形文字の方が、まだしも解読しやすいんじゃないだろうか。
「ん、んん!?　いやまぁそうかもしれんが！　そうかもしれんけども！　その、これは、ダメなのだ……」
慧音は頬を赤らめたまま、妙にもじもじしている。